
アルナベルツ戦記 First Priority 世界の果てで響く終焉唱

優希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アルナベルツ戦記 F i r s t P r i o r i t y 世界の果てで響く終焉唱

【Nコード】

N 3 4 3 7 Z

【作者名】

優希

【あらすじ】

クロムは父を裏切った者たちが嫌いだった。しかし、父の使いで嫌いなエルスティナに赴くことになりその末、世界を賭けた戦いに投じることになる

崩壊した城跡に少年と女性が訪れていた。

二人は廃城を見上げる。ここは北にあるベルマーレ大陸のエルステイナ城、二十三年前まで人々によって繁栄していた。しかし、最期の後継者を失い崩壊してしまった。

+

アルナベルツには四つの大陸と五つの種族が存在する。

南の大陸には神族のシュヴァンテ。

西の大陸には魔族のヴォルザクディオ。

東の大陸には聖族のリースリオ。

北の大陸には人族のベルマーレ。

最後は夜者、二十年前に起きた人族解放戦線の影響より新たに生まれた種。彼らは森の奥深くでひっそりと暮らしている。

夜者は呼び名にあるように夜にしか生きられない。

太陽に弱く、太陽の光を浴びすぎてしまうと弱り死に至るといふ。

そんな物語は北の大陸・ベルマーレから始まった。

+

王都エルステイナでは人族解放二十周年祭の前夜祭で街は賑わっていた。

商店街も居住区も飾り付けで大賑わいだ。

「祭りか？騒がしい・・・」

黒いフードマントを身に纏った男が王都に足を踏み入れた。

「さっさと用事を済ませて帰りたいんだけど・・・人が多いな、路地から廻って行くか」

彼の名はクロム。

彼は路地を歩いていく。目指すはエルステイナ城。

「離して下さい」

突然、叫びにも似た声が飛び込む。

路地奥の先に女性がガラの悪い男二人組に絡まれていた。

「ちよと奉仕して欲しんだよ。良いだろ嬢ちゃん」

「離して下さい。人呼びますよ」

「最高の快感を味あわせてやるから。きつと気に」

ドカツとガラの悪い男の一人が壁に叩きつけられ張り付いていた。

それをしたのはクロム本人。

「何さらすんじゃガキ」

「大の大人が女の子を寄つてたかつて、恥ずかしくないのかよ」

「うっせんだよ。ガキはすっこんで」

クロムは悪男の一人の話を最後まで訊かずに跳躍すると顔面めがけて蹴り壁に叩きつけた。

「今時あんな誘い方する奴がいるなんてな」

「あの、ありがとうございます。助かりました」

少女は深々と頭を下げた。

「ああ、別にいいよ。じゃ、僕は用事があるので、これで」

「どこかに行かれるのですか？お急ぎのようですね」

「・・・城に」

「お城、お城と申しますと、エルステイナ城ですか？」

「ああ、父さんのお使いでね」

「それでしたら、御一緒させて下さい。わたくしもエルステイナ城に向かっています。あっ、わたくしはシーラです。あなたのお

名前をお訊かせ下さい」

「・・・・・・・・クロム・・・・・・・・クロムだ」

十

「どうしてダメなんです」

「正式な手続きをとっていただかないと謁見は許可できません」

「緊急なんだ！」

城の入り口で警備兵と耳の尖った神族の女性と耳の長い魔族の男性が言い合っていた。

「どうかなさいましたの？」

「あつ、皇女様。彼らが女王陛下に謁見を求めておりまして」

「君はこの国のお姫様だったのか？」

「ごめんなさい。あまり口外するなどお母様から言われていますので・・・・・・・・この方々を入れて差し上げなさい」

「ですが」

「わたくしが許可します」

「はっ、仰せのままに」

十

クロム、シーラ、神族の女、魔族の男。4人は謁見の間に通された。

「よくいらっしやいました。ではさっそく、そちらのフードマントの方から用件を聞きましよう」

クロムは一步前に出た。

「女王陛下。先に言っておきます。これからアナタに敬語は使いま

せん」

警備兵やシーラたちはあまりにも大胆なことに言葉を失った。

「構いません。よろしいでしょう」

「ぼくがここにきたのは父さんのお使い、ただそれだけだ」

クロムは一步づつ女王に歩み女王を護る警備兵二人のところまで近づいた。

「これ以上は許可できない」

「下がりましたまえ」

「アンタらの影借りるよ」

瞬間、クロムの言葉と共に警備兵二人の影に一本づつ腕を突っ込んだ。

警備兵だけでなく周り全ての人々が驚いていた。

影から腕を抜くと両手には剣が握られていた。

金と銀の剣。

それを、床に突き立てた。

「これをアンタに返しに来た」と、クロムは淡々と答えた。

「その剣は！あなたこれをどこで……」

「父さんから預かった。返しに行ってくれってな」

「アナタの名をお聞きしても」

「クロム・ヴァルシオネ・ケインツベル。アンタの察しの通りぼくは夜者だ」と、クロムの黒い瞳が女王を睨み付けた。

周りがざわつき始める。そう夜者という言葉に、夜者とは夜にしか生きられない種。昼に出れないことはないが太陽が照り返している時にこの場にいること驚いているのだ。

「では、父の名は」

「父さんの名はユウキ・デイガイト・フライア・ケインツベル。……アンタらが、裏切ったこの世界唯一の背徳種」

「……ユウキ……」

「じゃ、ぼくはこれで失礼する。目的も果たしたし、アンタのそばに居したくないから」と、女王に背を向けると謁見の間から出てい

った。

「……………お母様……………」

シーラは心配そうに女王を見つめる。

女王は椅子から立ち上がると床に突き立てられた金と銀の剣を握った。

「懐かしい……………わたし……………わたしは……………」

女王の瞳からとめどなく涙があふれ出ていた。

「……………裏切った……………裏切りたくなかった……………でも、だけど……………ただ背徳種だからという……………理由で……………」

「

シーラや他のみんなは、なんと声をかけていいかわからず、ただその姿を見ていることしか出来ない。

「……………裏切ってしまった……………わたしは、わたしたちは……………英雄なんかじゃない……………」

その言葉に周りの人々はどよめいた。

「本当の、英雄は……………英雄は……………」

今から約百五十年前、神族と人族間で戦争があった。

神族の法力に対して人族は特別な力を持っていたわけではない。物と物を合成させる合成練金で対抗した。

しかしその結果は目に見えていた。

勝てる相手ではないことは解っていた。

神族は法力で人族を圧倒、勝利した

それ以降、人族は奴隷として扱われるようになった。

そして二十年前、人族解放戦と呼ばれる争いが起こり人族を解放に導いた三人の英雄。

神族のゼウデイス・エスタシオ

魔族のミール・ゴードイス

そして、人族のアルシエール・ベルマーレ・エルステイナ・アルナベルツ

しかし、それは結果的にそう呼ばれることになっただけである。

権力を持つものが真実を葬り偽りの真実を示した。

その結果が三族の英雄譚。

「本当に人族を解放に導いたのは彼、ユウキよ。……………彼が真に本当の英雄なのよ……………」

十

日は沈みかけていた。

夕日の眩しさを感じながら噴水中央広場に設けられたベンチにクロムは腰をかけていた。

「祭りがそんなに楽しいか？理解できん」

「ようやく見つけました。こんなところにいらしたのですね」と、聞き覚えのある声がクロムの耳に届いた。

「皇女様か？ぼくに何のようだ？」

「クロム様」

「アンタにそう呼ばれる筋合いはないな」

「……………わたくしの事、お嫌いですか？」

「……………正直に言おう。嫌いだな！」

「っ！……………やはり、お母様の所為なのですか？」

「偽りの三英雄に関わる者。例外なく全てが嫌いだよ！」

「……………偽り……………確かに、そうかもしれません。ですが……………」

「なんだ！」と、シーラを睨み付ける。

「……………お母様に、お訊きしました。二十年前の人族解放戦線の事を……確かにお母様や他の方々は貴方のお父様を裏切ってしまった。ですが、それは……………」

「父さんが背徳種だからか？」

「……………そう、です」

そのシーラ言葉にクロムは感情を爆発させた。

「人族の次は背徳種差別か！父さんが何をした！人族を解放に導いた。ただそれだけだろ！神族と魔族のハーフ。そのなになが悪い！父さんの両親が愛し合っていたからこそ父さんが産まれた！違うか！」

シーラはクロムに反論しようと言葉を探すが見つからない。正論を並べるクロムに言い訳なんて通じない。

「アンタもアイツラと同じって事だ！人の行為を無にして、有り難みすら分らない。しまいには真実を葬り、真実を知ってもなお、その真実から目を背け事実を受け入れない！」

シーラはクロムの視線から反らした。

「救いようがないな……………ぼくが夜者になったのは父さんの所為だ。だけどぼくは、父さんを恨んだりはしない。確かに最初は恨んでいた。けれど父さんは自分で招いた結果を悔やんで償おうとしている。だが偽りの三英雄共はどうだ。何もしようとしてない、ただ平和になった世界を謳歌しているだけじゃないか！」

「……………」

シーラはかける言葉が見つからず無言のまま唇を噛みしめた。

クロムの言っていることは正しかった。

お母様や他の三英雄は何もしてこなかった。

ただ生きてきただけ、シーラは一番近くでそれを見てきた。だから、嫌というほどよく分かる。

「もう会うことはないだろ。じゃあな、皇女様」

クロムは正門に向け歩きだした。

「！今から王都の外に出るおつもりですか？」

「さつきまで泊まっていこうかと思ってたけどやめた」

「・・・・・・・・わたくしが居るからですか？そうやって人を避けて生きていくおつもりですか？」

「避ける？違うな避けているのはアンタラだろ。夜者という種を避けている。違うか？」

日が沈みきっていた。

クロムはフードを脱ぎ顔を露わにした。

「・・・・・・・・世界から弾き出された種族。・・・・始めて、見ました」

「これ以上アンタと話しても無駄だ」と、今度こそ歩みを止めることなく正門を潜っていった。

漆黒の夜。

三十歳後半の男は二つの月が輝く空を見上げる。

「……また、始まるのか。運命に翻弄される物語が……」

男は手錠付きの両手を空に掲げ、一拍して何か決意を固めたかのよう
にその手を握り締めた。

「……だが、させはしない。物語は幸福で終わってこそ真
の終焉を迎えるんだ」

十

「夜通し歩きは疲れるなあ」

クロムはフードを被った姿でひとり呟く。

木々の隙間から朝日を感じながら森の奥にある小さな村に着いた。

そこはクロムが育った村だ。

察しはつくだろう、人口の九割は夜者だ。

クロムは見慣れた木製の古びた家の扉を開けた。家の中は全ての扉
が閉めきられている。

クロムの家だけではない、他の村人も全ての窓を閉め切っていた。

「ただいま」

「お帰りなさい」と、姉のリルフィーナが優しく笑みを浮かべ出迎
える。その瞳は黒かった。そうリルフィーナも夜者だ。

部屋に戻ったクロムはフードマントを脱ぐとベッドに寝転んだ。

昨日の疲れが一気に押し寄せてきたのだろう。

直ぐさま眠気が襲い深い眠りについた。

十

東の大陸リーズリオ。

聖族の王国、ウォルデルト。

その王城の中庭に緑色の瞳をした幼い少女が自分より大きい杖のような物を手に目の前にいる五十代の男　　ワイズウォーグ・リーズリオ・ウォルデルトを見据えていた。

「リーズラよ。解っているな」

「はい」

リーズラは全てを受け入れ決心したような眼差しをしていた。

「お前が失敗すれば我々、聖族の未来は開けない」

「解っています」

「では、リーズラ・リーズリオ・ウォルデルトよ。今この時よりアンヴィバレンツの使用と四聖獣の召喚を許可する」

「ありがとうございます」と、幼き少女は一礼した。

十

太陽は沈んでいた。

普通の人であれば、一日の疲れを癒すために眠る時間帯。しかし、夜者の村は違った。

昼間は閉めきられていた窓や扉が開かれ賑わう声が村中から聞こえてくる。

クロムの家もその中のひとつだった。

「父さん、話があるんだ」

クロムはリビングでゆっくりしている義父であるユウキに話をきりだした。

今まで触れることはなかった。

暗黙のルールのように訊くことのなかった過去の話。

クロムとリルフィーナはユウキと向かい合うようにリビングテーブルを挟んで座っていた。

「人族解放戦線でのことなんだ。ぼくが知っているのは父さんが人族を解放に導いたって事と、仲間だった偽りの三英雄に裏切られたって事。それから、夜者を生み出す原因を作ってしまったって事だけ」

リルフィーナは、感謝を口にした。今まで伝えることの出来なかった素直な気持ち。

「父さま、今まで私たちを引き取り養ってくれたことに感謝します。何が良くて、何が悪いのか。だから」

一時の沈黙が襲う。ユウキは考えた末に沈黙を破るように口を開いた。

「……そうだな、もう話してもいいかもしれないな。辛い真実を語る事になるが、いいか？」

「覚悟は、ある！」

クロムとリルフィーナは頷いた。

「それじゃ、後に三英雄と呼ばれる事になる、かつて仲間だった名前を教えよう。」

神族のゼウデイス・エスタシオ。

魔族のミール・ゴードイス。

そして、人族のアルシエル・ベルマーレ・エルステイナ・アルナベルツ。

クロムはアルシエルと昨日会っているだろう」

「……女王ですよね！」

ユウキは頷くとコップを手にし口に含むとテーブルに戻した。

「……………じゃ、語ろう。真の物語を」

十

エルステイナ城。

女王の間。

「……………ユウキツ……………」

女王 アルシエール・ベルマーレ・エルステイナ・アルナベルツ。

「今さら返されても、私にどうしろというのかしらね」

アルシエールは壁に飾られた金と銀の剣を見つめた。それを見つめていると二十年前の光景が脳裏をかすめ笑みがこぼれた。

若い時のユウキが『金の剣・オルディウス』と『銀の剣・サウティス』を操る姿。

「ごほっ、ごほっ」

アルシエールは手で口を押さえ咳をした。

口から離れた手を見ると掌一杯に血が付いていた。

「もう、永くないみたい……………」と、窓の外を見上げた。

「ユウキ、貴方の言った通り空はあの頃と変わらないね。二十年前と同じ、夜になれば黒くなり朝になれば青く色を変え私たちに太陽の恵みと睡眠を与えてくれている」

十

「世界の為、人族の為、愛する人との約束の為、だからオレは……………両親をこの手でやった」

ユウキは手錠されている腕を見つめた。

いや、されているのではなく、している。

ユウキの手錠は自分に対する戒めなのだとクロムとリルフィーナは今ようやく理解した。

「……それが真実……」と、クロムは呟いた。

「……うっ、ひぐっ……ひぐっ……」

クロムの隣ではリルフィーナが泣きじゃくっていた。

「リルねえ。そんなに泣くことじゃ」

「……だってえ……父さまが……父さまがあ……悪者みたいで……」

「そんな事は無い」と、ユウキはリルフィーナの頭を撫でた。

「えっ？」

「だからこそ君たちに出会えた。不幸なことばかりじゃない」

「あつ……父さまっ……」

リルフィーナは頬を赤らめ幸せそうに微笑んだ。

「クロム。だからお前が三英雄を恨む必要はないんだ」

「だけど……それじゃ父さんは世界中から悪者扱いじゃないか！」

「いいんだよそれで。英雄呼ばわりされて祭り上げられるよりずっとましだ。だから、な？」

「……父さんが赦してるって、そう言うなら……」

「まあ、すぐには言わん。少しずつでいいんだ。少しずつで」

ユウキは優しく微笑んだ。

十

昼時。

コンコンと訪問者によって扉が叩かれた。

「はい」と、リルフィーナが声を上げ扉へ駆け寄ろうとするところにクロムが「ぼくが出るから」とノブに手をかけた。扉を開いた

その先にいる者たちを見てクロムは言葉を失った。

「っ！」

そこに、シーラと彼女と共に謁見した神族の女と魔族の男がいた。クロムは一度目を閉じると、一拍おいて意を決したように言葉を紡いだ。

「……………ウチに何のようだ皇女様」

「……………あの、ユウキ様は、ご在宅でしょうか？」

十

「で、人族のお姫様が背徳種のオレに何のご用なんです？」

ユウキはテーブルを挟んでシーラと他二人は座っている。

「あの、再確認させて下さい。貴方はユウキ・ヴォルザクディオ・デイガイト・シュヴァンテ・フライア・ケインツベルですか？」

「そうだが」

「今日はユウキ様にお願いがあつて伺いました。真の英雄である貴方にしかお願いできないのです」

「……………英雄、かつ、違うな。英雄て言うのは過去の功績や結果により人から与えられる称号。オレは英雄なんかじゃない。オレは咎人だ」

「ですが、人族を解放に導いたお方。その功績は事実なはずです」

「ふっ、前と言つてることが正反対だな」と、クロムが茶々を入れた。てきた。

「どんな事でも言つて下さつても結構です。ですが、再び世界が危機に招かれている。それは、真実です」

ユウキは無言で眉をひそめた。

「神族の王アルマイルと魔族の王イスカディア。お二人が世界を統括しようとしているのです」

「統括？別に世界が一つになることの何に問題があるんだ」

「やり方に問題があるのです。力による制圧など許すわけにはいきません」

「制圧かつ。で、話を変えるが姫様そちらの方々の紹介をしてほしいのだが」

「あつ、すみません。紹介がまだでしたね。こちらの魔族の男性はゼルファード・ヴォルザクディオ・デイガイト。こちらの神族の女性にはレニーシャ・シユヴァンテ・フライアです」

「！　　デイガイトに・・・フライア・・・王家の血を継ぐ者」

魔族のゼルファードがユウキを見据える。

「アンタがユウキか」

神族のレニーシャが呟く。

「確かに面影がありますわね」

「三種族の王位継承者が揃って頼みに来てるってことは相当ヤバイ状況なのは分かった。しかし、オレも歳だ」

ユウキは席を立ち上がる。と「そんなんっ！」と、続いてシーラも勢いよく立ち上がった。

「だから、クロムを連れていくといい」

ユウキはクロムの肩を軽く叩いた。

しかし、クロム本人も驚きを隠せなかった。

「父さま、なに冗談を言ってるんですか？」

リルフィーナが割って入ってきた。

「冗談だと思っつか？」

ユウキの目を見てリルフィーナは何も言えなくなった。本気の目をしていたからだ。

「オレの全てを与えている」

ユウキはクロムに向き直る。

「やっってくれるか？」

そんなユウキの言葉にクロムは小さく笑った。

「父さんの頼みならばくが断る理由はないよ」

十

玄関前。

リルフィーナは、クロムに忘れ物はないか再確認する。

「薬草は持った？他に忘れ物はない？」

「リルねえ。それも十二回目だよ。ちゃんと持ったし忘れ物ないから」と、クロムはフードコートを広げて見せた。

「クロム。これを持っていくといい」

ユウキは二本の剣を渡した。その剣はそれぞれ異なる形をしていた。

「これは？・・・」

「フリーディアとジャステリエだ。使え」

「・・・ありがとう。父さん」

クロムは両手に剣を握ると、自分の影に吸い込ませ収めた。

「頑張つて来い」

ユウキはエールを送った。

クロムは力強く頷くとフードを被り扉を開け太陽の照らす外へと出ていった。

十

東の大陸リーズリオ。

森の奥にある湖でリーラは水浴びをしていた。その光景は神秘的で踊っているようにも見えた。

ガサツという茂みの音に、リーラは素早く杖を立て掛けていた樹木

の所まで駆け寄り、杖を音のした茂みに向け構えた。

「……………」

沈黙が流れた。

どれくらい経ったか分からない。

暫くするとリーラは「気のせいね」と杖を再び樹木に立て掛け湖から上がった。彼女は樹木の根本にたたんで置いた服に腕をおした。「失敗は赦されない。あと五年、それまでに……」

くくという音が聞こえリーラは顔を赤く染めお腹を押さえた。

「お腹空きました。町まで下りて今後のこと考えましょう。まず腹ごしらえです」

リーラは杖を抱え町へ向け歩きだした。

十

クロムが村の外れに差し掛かるとシーラ、ゼルフアーダ、レニーシヤが待っていた。

「ごめん、待たせたかな？」

その問いにゼルフアーダは「いいや」と、呟いた。

「待たせたと言うより待ってたって感じよね」と、レニーシヤ。

「……あの、おひとつ伺っても宜しいですか？」

シーラがおどおどした感じでクロムに寄ってきた。

「ん、何？」

「……わたくしの事……まだ、赦してはくれませんか？」

そんな事かとクロムは頭をかいた。

「はあく、父さんが赦してるっていうのに……ぼくだけが赦さな
いなんて……理不尽だろ」と、吐き捨てると先行していった。

「っ！ありがとうございます。これから宜しくお願いいたしますね。クロム様」

十

南西に位置する墮天帝国。

その中心に真新しい建造物・墮天城があった。

城内の装飾は神族のとも魔族のとも取れず、中立的な造りをしていた。

そして、王室には神族の王、アルマイル・シュヴァンテ・フライア・アルナベルツと

魔族の王、イスカディア・ヴォルザクディオ・ディガイト・アルナベルツがいた。

「ゼルフアードとレニーシャが裏切ったようだ」と、イスカディア。

「別に焦る必要はない。誰も我らに勝てはしないのだからな」と、アルマイルはたんたと答える。

「・・・そうだなアルマ。我らには最後の切り札があったな」

「そういうことだ、イスカ」

十

夕刻。

空は赤々と染まっていた。

南西に向けて海の上を走る一隻の船がある。

その甲板にクロム、シーラ、ゼルフアード、レニーシャの姿が伺えた。

「レニーシャ様、前方に見えるアレがそうなのですか？」

シーラはレニーシャに訊ねる。

「ええ、神族と魔族の新帝国・墮天帝国です」
「しかし、やっぱり何度見てもいけ好かねーな。あの姿」
ゼルファードは呟いた。
「自分の故郷を否定するか普通」
クロムは前方に見える墮天帝国を見つめた。

十

クロムの実家。
リルフィーナはリビングテーブルの上で日記を書いていた。そこに
ユウキが部屋から出てきた。
「リル、ちよと出てくる」
ユウキは一言伝えると家を出ていった。
一人残されたリルフィーナは「父、さま？」と呟いた。

十

「多いな」と、ゼルファード。
「多いつてか、多すぎだろ」と、クロム。
墮天帝国に着いたクロムたちを待ち受けていたのは、地平線まで続
くほどの神族と魔族の軍勢だった。
数は有に万は下らない。
「逃げたくなっちゃったの？」と、レニーシャは弓・キュリウスを
敵陣に向け弦を引く。
「そんな分けないですわよね？クロム様」と、シーラは剣・サウゲ
ウスを構える。

「やっぱり、多いな」とゼルファードは斧・ライズを頭上で回す。

クロムは自身の影に両の手を突っ込み剣を引き抜いた。

「みんな準備はいいか？」

シーラ、ゼルファード、レニーシャは頷いた。

クロムはフリーディアとジャステリエを敵軍勢に向け構える。

「じゃ、行こうか！」

クロムの掛け声と共にシーラたちは軍勢の中に飛び込んでいく。

十

墮天城内の王室。

アルマイルとイスカディアは座っていた椅子から立ち上がった。

「ついに来たか？」と、イスカディア。

「そのようだな、では、我らも出迎えの準備をしようじゃないか！」

「そうだな」

アルマイルとイスカディアは部屋を出ていった。

十

墮天軍勢の中、先を行くゼルファードの後方からレニーシャはキュリウスで無数の矢を放ち支援する。

クロムとシーラは互いに背中合わせになり眼前の敵をなぎ払う。

「クッ、ちよつとキツイかつ。レニーシャ、クロムは今どの辺りにいる」と、ゼルファード。

「お城に近い位置みたい」

「強いわけじゃないが、多い！」

クロムはひたすら迫り来る敵を倒していくがキリがない。

シーラも眼前の敵を倒していく。

瞬間、レニーシャと一瞬眼が合いアイコンタクトで何をするかシーラは理解した。

突然、シーラはクロムの背中を押して行く。

その行動にクロムは戸惑い何が起きたのか、一瞬分からなかった。

シーラが押すのを止めたのはその中に入ってからだ。

「クロム様は先に行ってください！わたくしたちもすぐに追いかけますから」

クロムが理解したときはすでに遅かった。ガコンと音を立てそれは閉まる。

そう、そこは墮天城内。眼前の扉は城門。

シーラたちはクロムにすべてを託し中に押し入れたのだと理解できた。

「ぼくに背負えというのか。世界を、全てを・・・背負えと・・・くっ」

+

墮天城、城門前。

敵軍勢を目の前にシーラ、ゼルフアーダ、レニーシャはひたすらなぎ払っていく。

「全く減ってる気がしないな」と、ゼルフアーダがぼやく。

「それだけ墮天軍が強大だって事よね」と、シーラが返した。

シーラは城門を背に眼前の敵軍勢を叩ききつていく。

『・・・クロム様・・・わたくしは、初めて会ったあの日。助けて
いただいたときから・・・きつと、私は・・・クロム様に、好意を
抱いていました・・・ですから、嫌いだと、言われたとき、目の前
が真っ暗になって・・・。。。。それでも、今でも、わたくしは、ア
ナタを・・・』

クロムはすい寄せられるように走りその度に足音が城内に響きわたる。

しばらくしてクロムは扉の前で足を止めた。

その扉に手をかけ意を決して開いた。

そこは、大広間だった。

瞬間、クロムの顔が険しくなる。

それは、部屋の中央にはアルマイルとイスカディアがいた。

「アルマイル！、イスカディア！」と、クロムは二人の名を叫んだ。アルマイルは一步前に出た。

「キミが誰だか知らないが、我々は王族だ。様を付けたまえ、無礼ではないか」

「アンタらに様を付ける通りも敬語を使うつもりもない！」

「お前は何をしに来た」と、イスカディアは淡々と言葉を紡ぐ。

「アンタらがこれからしようとすることを止めに来た。神族と魔族による世界征服だ」

アルマイルは、しれつと答える。

「征服？言葉が悪いな。統括だよ。我々が行おうとしていることは」

「そんなのただの言葉遊びだ。力による支配が統括な訳がない！そんなことあつてはいけないんだ！」

アルマイルとイスカディアにクロムは一步も引かない。

「権力者なら考える！自分の私利私欲の為じゃなく、世界に生きる多民族やアンタらの下にいる部下たちのことを！」

「アマいな。そんな考えじゃ何も変えられない。人も、世界も、何一つ変えられないぞ！」

アルマイルは言いきった。

「それでも、それでもぼくは！」

クロムは強く拳を握り締める。

「護りたい人たちがっ、世界がっ、あるんだああああ！」

刹那、クロムは雄叫びと共に自身の影から自由の剣・フリーディアと正義の剣・ジャステリエを抜き、眼前の敵・アルマイルとイスカディアに向かつて走り出した。

それを見たイスカディアが吼える。

「向かってこい！向かってくるがいい！お前の信じるモノのために、それを完膚無きまでに叩き潰してやる！」

十

日は沈みきつていて全てのモノが静寂に包まれている。

人族の繁栄都市・王都エルステイナ。

王都中央には街のシンボルでもあるエルステイナ城が堂々とそびえ立っている。

女王の間。

ベッドで眠るアルシエール女王を見下ろす人影があった。体型からして男だ

人影は顔を貸すように仮面を被り、両手には手錠をしていた。

仮面の男は「アーシエ」と、呟いた。

するとアルシエールは何かに導かれるように目を覚ました。

「……んっ……」

アルシエールは部屋にいる仮面の男を見ても驚くことも警備兵を呼ぼうともしなかった。

アルシエールは察したのだ仮面の男は自分を知っている。

そして、自分が知っているが誰かなのだと。

「……二十一年、ぶりだね……」と、アルシエールは臍をゆっくり起こした。

「ああ、久しぶり、よく、分かったな」と、仮面を外した。アルシエールの察した通り仮面の男は嘗ての仲間であり、大切だった人であり、裏切ってしまった人。

「・・・懐かしい呼び名が訊こえたので・・・アナタが呼んだのでしょ、ユウキ」

「アーシエか？」

「アナタが付けてくれた愛称だから」

「そう、だったよな」と、ユウキはアルシエールとの出逢いを思い返した。

「キミと出会ってから色々あったから、力を貸して欲しいから始まったんだよな、そして、いつの間にか人族を解放するために戦った」

その後は、言えなかった。

仲間に裏切られたとはユウキは口にしたくなかった。

一時の静寂が二人を包んだ。

その静寂をユウキ自ら破いた。

「アーシエ、何故、彼女をオレのところに寄越したんだ？」

「シーラですか？」

アルシエールの言葉にユウキは頷いた。

「・・・彼が・・・クロムが、世界を変えてくれるかもしれないと思ったから。どことなく出会った頃のアナタに似ているところがあった。だから、頼ってしまった。・・・あの、頃のように・・・」

「全て計算してのこと、かつ。オレは、キミの手の上で踊らされていたって事かつ」

「ちが、それは違います。そうなればいいなと願っていただけです。・・・ただ、それだけで・・・」

「別に怒ってるわけじゃないよ。オレは話をしに来ただけなんだ」

「ありがとう。それと、ごめんなさい」

「いきなり、なんの礼と詫びなんだよ」

アルシエールは一度口紡いだが意を決した。

「……今までのこと、全てに対して、最期にあなたに会えて本当によかった」

「……最期……どう言うことだ！」

「そのままの意味ですよ。わたしはもう、そう長くはない……ゴホッ、ゴホッ」

アルシエールは咳をし口元から一筋の真っ赤な血を流した。

「アーシエッ！」

「これはわたしの犯した罪への罰」

「罪ってなんだ！オマエは罰を承けることなんて何もしてないだろ！」

「アナタに話さなくちゃいけないことがあるの」

「もういい、喋るな！」

「シーラのこと隠してたことあるの……」と、アルシエールはユウキの手を掴んだ。

十

墮天城内、大広間。

二つの剣がせめぎ合う。

クロムとイスカディアだ。

アルマイルは王壇の上にある装飾された椅子に座り高みの見物と言うように二人の戦いをみていた。

「我々に勝てると思うてか！」

イスカディアは剣を弾き互いに間合いを取った。

「お前の名はなんという」

「クロムだ。クロム・ヴァルシオネ・ケインツベル

「我はイスカディア・ヴォルザクディオ・デイガイト・アルナベルツ。我が名をお前の魂に刻み付けてやる！」

刹那、イスカディアはクロムの視界から消えと同時にクロムは腹部に衝撃を覚え痛みを表現する間もなく壁に叩きつけられた。

「所詮、お前は人族。魔族である我に勝てるはずはない」

「ち、違う。僕は、夜者だ！」

夜者という言葉がスイツチだった。

影がクロムの躰を侵食していった。

刹那

「もう、止められない」と、言うクロムの呟きと同時にイスカディアの腹部をクロムの腕が貫通していた。

イスカディアは大量の血を吹き出し倒れた。

いや、動かぬ物 屍となった。

ガタツとアルマイルは立ち上がりイスカディアに駆けより抱き起こした。

「貴様！何をしたアアアアア！」

「夜者を眼下してきたアンタには解るはずはない！」と、クロムはアルマイルを見下す。

「なんだと！」

「夜者の事を何も知らない、夜者とは何か、どんな力を持っているのか」

アルマイルはキリツと歯をならす。

「影、闇、陰、夜。それら全て連なるものそれが夜者。昼と夜。光と影。表と裏。世界の半分は夜者の存在を認めている。アンタが神で光なら夜を連なる者としてよく いや、オレがアンタの計画を叩き潰す！」

エルステイナ城。

女王の間。

「もついい、喋るな！」

ユウキは話を止めないアルシエールを止めようとするが「シーラのこと隠してたことあるの・・・」と、アルシエールはユウキの手を掴んだ。

それは最後まで訊いて欲しいというアルシエールの意思表示だとユウキは理解し頷くしか出来なかった。

「二十年前、アナタとの、たった一度の交わり、その時の・・・

」

「えっ？」

ユウキは己の耳を疑った。

「・・・私は、貴方にしか躰を許してはいません。あの時の一度だけ・・・」

「それじゃ、シーラはオレとキミの・・・娘って、ことなのかっ！」

アルシエールは頷く代わりに微笑んだ。

「あの子、が・・・」と、ユウキはシーラの事を思い出そうと眼を閉じた。

「これは運命なのか？」

「これを・・・」と、アルシエールは枕下に隠していた赤表紙の書物をユウキに渡した。

ユウキは書物を開いてみると真っ白だった。

「・・・これは？」

「・・・シユヴァルツァーザルクです・・・コホッ・・・」

「シユヴァ・・・ルツァー、ザルク？・・・創造詩か！」

「ええ」

「世界を創造することも破滅させるとも伝えられている書物・・・

伝説の代物と思っていたんだが、そんな物をなぜキミが」

「それは代々、エルステイナ家に伝えられて・・・いたものです・・・」

「そんな大事な物をどうして、オレなんか」

アルシエールは微笑んで見せた。

「アナタなら、正しく使ってくれると思ったから」

「アーシエツ」

「本当にありがとう、ごめんなさい。わたしには言葉でしか、アナタに伝えることが出来なくて」

アルシエールは涙を流しながら言葉にできない感謝を紡いだ。

「そんなことない！キミがいたから今のオレがいる！キミを愛したからこそ娘にだって会えたんだ！」

「・・・ユウキ・・・ありがとう・・・それ以上の言葉、見つからないよっ・・・ゴホッ」

突如、アルシエールが血を吐き出した。

「アーシエツ！」

ユウキはアルシエールを抱き締めた。

血で服が汚れようがそんなのはどうでもよかった。

「・・・ごめん、服・・・汚しちゃ・・・」

アルシエールの咳が止まらず、そのたびに血を吐き出した。ユウキは力一杯アルシエールを抱き締めた。

彼自身感じ取れたのだ。

もう最期なんだと、

アルシエールの命の灯火が消えようとしているのだと、

だから、ユウキは、抱き締めた。

初めて愛した大切な人を、

最期の一秒を共に過ごすあの時の約束を果たすために、

想いを込めて抱き締めた。

その温もりを忘れないために、

どれほど抱き締めていただろうか。時間の感覚すら分からなくなっ
た。

「アーシエツ？」

ユウキは抱き締めたまま、彼女の名を呼ぶが返事はなかった。

ゆっくりとアルシエールの躰を離すとそこには幸せそうに微笑む彼
女の顔があった。

「アーシエツ」

分かっていった。

言わずとも分かる。

アルシエールの躰が少しずつ冷たくなっていく。

それがなにを物語っているのかユウキは理解していた。

アルシエールはもう、居ないのだと、

この世界中どこを探しても見つけられない場所に逝ったのだと、
泣いていた。

ユウキは泣いていた。

声をかみ殺し涙だけ流し泣いていた。

大切な人の為に

たった一人の女性の為に

また、明日を生きる為に

涙が枯れるほど泣いていた。

瞬間、太陽の沈んだ夜の世界を目映い光で照らされた。

十

アルマイルは屍となったイスカディアの肉を食らう。

「食っているのか！アンタ！」

それは神族王家だけに許された能力。他の肉を食らうことでその者の力を己の中に取り込む事。

「神と魔の融合族。墮天族とも呼ぶがいい」

「・・・墮天族・・・ふざけんのも対外にしろ！」

「それは我々の台詞だ！世界から弾き出された存在が！」

クロムとアルマイルは互いに睨み合い利き腕を突き出すと光を輝かせた。

「アルマ　　！」と、クロム黒い閃光。

「クロ　　ム！」と、アルマイルは青い輝き。

声を張り上げ、技を互いに放った。

閃光。

二つの閃光が重なり合い激しく輝いた。その光は一段と激しさを増し、そして爆音と共に太陽の沈んだ闇の世界を光明の輝きで包んだ。

十

輝きに満ちた夜空を自分の身長より大きな杖を持った少女が見上げていた。

「・・・綺麗な、輝き・・・この光が、わたしの進む未来への残照ではなく、光明であるとよいのですが」

少女は決意の眼差しで夜空を見上げていた。

十

部屋に培養槽とそれを繋ぐ機械がある。

培養槽の中には腰まで延びた長い髪の女と彼女を繋ぐ無数のケーブル

ル。

窓の外は暗く夜であることは明白だ。しかし突然、目映い光が世界
全てを包み込む。

その光に誘われるように女は目を覚めた。

そして、何かの名を口にした。

「……………アムリア……………」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3437z/>

アルナベルツ戦記 First Priority 世界の果てで響く終焉唱

2011年12月11日21時50分発行